

論コミ通信 2021年12月号

SFCフォーラムと中学高校大学をつなぐ情報紙

発行：
SFCフォーラム
論理コミュニケーション教育部門
2021年12月24日(金)
vol.10

今回の論コミ通信は、大きく2つのテーマをとりあげます。1つめは「論理コミュニケーション教育セミナー」、2つめはよい結果をおさめた学校の実践例の紹介です。

「論理コミュニケーション教育セミナー2021」

2021年9月18日土曜日、「論理コミュニケーション教育セミナー2021」をオンラインにて開催しました。2018年から毎年行っている本セミナー(慶應大学SFC研究所プラットフォームデザイン・ラボ主催)も、今年で4年目となりました。その模様の一部をお伝えします。

論理コミュニケーションを活用した探究的なキャリア教育への挑戦 梅嶋真樹(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 特任准教授、グローバルリサーチインスティテュート所員、文部科学省ICT活用教育アドバイザー)



■SFCフォーラムだからできるキャリア教育

SFCフォーラムは、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス創設時に大学研究の社会的還元を目的に創設された組織です。論理コミュニケーションも大学での基礎研究の社会還元の一つです。現在は、キャリア論の分野で多くの功績を残してきた花田先生(SFCフォーラム代表理事)をはじめ、大学で多くの研究を先導してきた先生方や、公認会計士といった専門職によって支えられている、専門的な言葉で言うと「中間法人」という新しい組織です。

一つはっきりさせておきたいのは、学校教育と教育産業は異なるということです。教育産業は、産業である以上、「儲け」が最終目的です。しかし学校教育の最終目的はそうではありません(もし儲けが最終目的ならば、学校は企業と同率の納税が求められるはず)。SFCフォーラムは、「儲け」が最終目的の教育産業とは一線を画しています。このようなSFCフォーラムが新たな開発目標として選んだのが「キャリア教育」です。その開発においては、論理コミュニケーションにおける指導及び計測ノウハウを第一の根拠、論理コミュニケーション導入校の先生方との協働を第二の根拠、医療や電力のような国民生活に必須な国の重要インフラの維持発展を先導している大学や産業界のリーダーとの協働を第三の根拠とし、開発を推進すると聞いております。開発リーダーには、仁藤先生が就任されました。論理コミュニケーション指導の経験、またSDGsで提唱される男女平等社会の中での女性キャリアを開拓している方でもあります。ぜひご協力をお願いします。

■研究大学(Research University)へ進むというキャリアを高校生に持って欲しい

高校の先生方へお願いがあります。それは、生徒の視点をResearch University(研究大学)へ向けてほしいということです。研究大学には、文系や理系に関係無く、「研究」と「教育」があります。それは、慶應、早稲田、東大…といったいわゆる高偏差値の有名大学を目指してほしいという意味ではありません。研究大学は全国にあります。では、どのように研究大学を見つければよいのでしょうか。

ここで、研究大学の教員に求められるモノを、右(資料)に示します。この中でも一番大切なのは、2つ目の査読論文です。研究大学の情報発信として、査読論文が圧倒的に重要です。最近、日本勢は、国際的な学会での査読論文の数が減っており、自分自身も更なる精進を誓うところです。なお、査読論文に博士号は必須ではありませんが、査読論文を書くには博士号がないとなかなか難しいという現実があります。そうした論文は、無料で検索して読むことができます。例えば、J-Stage(<https://www.jstage.jst.go.jp>)やCiNii(<https://ci.nii.ac.jp>)で関心あるテーマの査読論文を読むことができます。

大学生だけではなく高校生の皆さんも、読み手に分かりやすく書かれた、逆に言えば、分かる部分だけを取り出した情報発信に飛びつくのではなく、「論文」を手にしてほしいのです。しかし、大学教員をやっている、自らの意見を根拠で支える構図を作り上げ、更にそれらの根拠を読解した論文によって説明できる学生は少数です。

最後に、「キャリア」というと進学、就職と言う近視眼的になりがちですが、これまで多くの大学は、就職予備校化を抗ってきました。しかし、ノーベル賞受賞の先生方が、毎度、研究者予備軍の少なさを憂いているように、近い将来、研究をしない教員や学生が集う大学が日本に生まれるかもしれません。研究大学(Research University)は、世界では隆盛、日本では存亡の危機と言う、不都合な真実はもっと社会に知られるべきでしょう。

研究大学の教員に求められるモノ

- 自分の主張を自己評価と言うルール5に基づき論述
- 著作、プロトタイプ、会議、投稿
- 自分の主張を査読(他者評価)と言うルール5に基づき論述
- 査読論文
- 研究大学のスタッフとしての基礎能力のお免状
- 博士号
- 研究成果の社会還元
- 起業、政策立案、ボランティア、公的役職

論コミの力を使ってキャリアを考えるプログラム 仁藤亜里(一般財団法人SFCフォーラム 論理コミュニケーション教育部門 教材開発責任者)



■現在SFCフォーラムが新たに挑戦していること

現在、SFCフォーラムは、論理コミュニケーションを活かしたキャリア教育モデルを鋭意開発中です。まず、現在論理コミュニケーションの授業で教えている、論述力で重要なのは、以下二点です。

1. 自分の意見や根拠を証拠(エビデンス)となる事例で支えて説明すること(ルール4)
2. 根拠と事例(証拠)から、最終的な意見の一つを選ぶこと(ルール5)

この2番が特に重要であり、根拠と事例から意見の一つに絞るからこそ、ルール1の段階では意見を“自由に”書くことが出来ます。この論コミで培った論述力は、キャリアを選択するシーンでも活用できる力です。

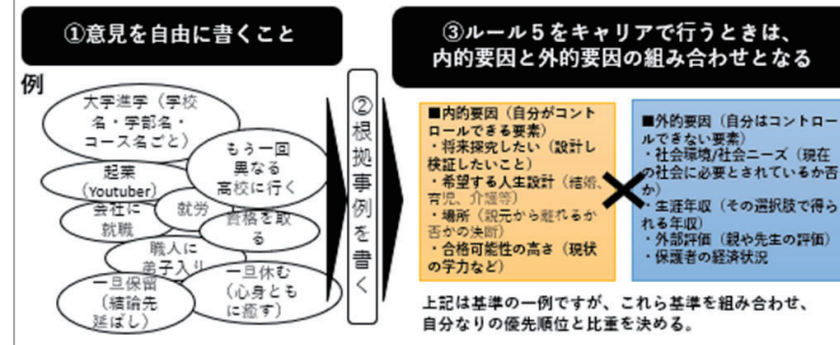
そして今、考えている論コミを活かしたキャリア教育で重視したいことは大きく二点です。

- <特徴1>: キャリア選択においても、「意見を出すときは自由に複数書く」というルール1の実現
- <特徴2>: 意見ありきではなく、「根拠・事例から選ぶ」というルール5の実現

しかし、キャリアをテーマにした時には、最初から「意見が自由に書けない」状態や、「意見ありきになってしまう」状態が考えられます。その壁を乗り越えて、キャリアがテーマになっても、「複数の意見の中から、根拠と事例をもとに意見を決める」という授業の中で教えてきた論述の構造を徹底し、実現できることを目指していきます。

論コミを活用したキャリア教育として 考えている方向性

- 最初から意見が固まっている「意見ありき」ではなく、**まずは自由に意見が出せる状態(Step1のルール1)**
- そして自由に書いた意見の中から、**根拠・事例の内容をもとに、自分らしさから選ばれたルール5の基準で意見を選択する状態(Step3のルール5)**。



梅嶋先生への質問!
「いわゆる有名大学=研究大学(Research University)ではないのでしょうか?」

(慶大SFC研、梅嶋) そうとは限りません。たとえば、今コロナ禍で注目されるウィルス研究であれば、長崎大学がトップレベルでそれは論文検索で論文数を確認すれば明らかです。僕の専門であるエネルギーの分野で言えば、いわゆる東工大・東大・京大…が従来のトップ研究大学でした。しかし今、エネルギーはそのモデルが太陽光など再生可能エネルギー利用、IoTの推進による分散電源化など、100年に一度の変革期を迎えており、どこが次の主力の研究大学になるか争っているカオスの状態です。なお、私の努力が足りなく(笑)、慶大はエネルギーの分野でトップ研究大学とは断言できませんが、私の所属するラボラトリー(研究所)は、ローソンと連携しての未来のコンビニや、インテックと連携しての未来の部屋と言うプロトタイプを提案しています。研究大学は繋がっています。いま強く連携しているのは、神奈川工科大学の一色先生のラボラトリーです。だから、**高校生が自身の研究テーマを持ち、自分だけの研究大学ランキングを持つことは可能です。**

もし、「研究すること」をキャリアの一つに据えることができれば、今進められている高校の探究学習がその基礎になることは間違いないでしょう。一方、企業を見ても、新たな分野を研究開発出来る人材を求めています。例えば、サントリーの社長は、45歳定年制を提案しました。つまり、会社が仕事を考えてくれる時代は終わり、自らがキャリアを設計しないと行けなくなってきたのです。

なお、ここで言うキャリアとは、大学進学だけを指していません。文部科学省の資料によると、キャリアとは「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見だしていく連なりや積み重ね」とされています(文部科学省、『キャリア教育の手引き』、平成23年11月より)。上述した役割の中には、仕事や父親・母親、地域社会での役割など様々な役割が含まれています。人は生きていく中で、様々なタイミングで、複数回キャリアの選択を行います。高校卒業時だけではなく、**一生涯使えるモデル開発**を目指しています。

また上記考えに対して、論コミ導入校である成蹊高校の政岡先生にご賛同いただき、この秋から成蹊高校内で実際に仁藤が授業を担当しキャリア講座を実施する運びとなりました。実際の生徒の皆さんと出会い、教える中で、高校生が今抱えている課題をとらえ、上記モデルをさらに、高校生に沿った内容になるように、開発していきたいと考えております。

「論コミ」実施校による実践レポート②（金蘭会高校）

こんな工夫をしてみました

授業内での文章共有と声かけに工夫、また独自の記述演習を追加。
外部の作文コンテストにも挑戦！

■金蘭会高等学校・中学校 高橋和子先生（国語科）

対象：高校3年生（19名×2クラス）

実施科目：「国語演習」4単位の中で、週に1～2時間程度実施

期間：2020年4月～12月に断続的に実施（学校としては2020年度に開始）

実施シラバス：標準モデル15コマ（検定3回）



■設計図を全体に共有し、良い部分を取り上げて励ます

本校での授業実践の工夫として、主に二つ挙げられるかと思います。

一つ目は、授業での生徒への声かけです。全員の答えをプロジェクターに映して共有し、できる限り教師が読み上げて必ずどこか（論コミの答えとして誤っている場合は、文字の美しさ・配置の的確さ・内容から推察される人柄の良さ等）をほめる時間をとりました。すると、生徒は自信をもって書くようになり、また読まれてもよい文章を意識して書くようにもなりました。さらに友だちの言い回しや事例を参考に、自身の表現力を高めていきました。他にも、『「今日もカレーが食べたい」は意見。』私はカレーが好きだから』は根拠。『タベ（2020年5月8日）も一昨日も家でカレーだった。』は事例。』といった簡単なパターンを言い続けたところ、9月頃には「先生、『事例』ってなんですか。」と質問するような生徒はいなくなっていました。

■追加の演習と添削指導、設計図を活かす機会をふやす

二つ目に、外部評価を含めた独自演習の追加と添削指導です。13回が終わったあたり（11月には公募制推薦入試が一斉に始まりますので、それに間に合うように）で、以下のような課題を追加で行いました。

（課題）文章の設計図を用いて課題を600字で記述する。

①11月 志望理由書作成（例：千里金蘭大学 看護学部 看護学科の志望理由書）

②11月 小論文過去問（例：千里金蘭大学 看護学部 過去問「私の理想とする看護師像」）

③11月 学部ごと課題（『蛍雪時代特別号 9月』の重要テーマからの抜粋 例：法学部志望者に「裁判員裁判の量刑義務」等）

なお、課題文が比較的短く、文章の設計図に取りかかりやすいものを選んだつもりです。明らかに大量の長文読解や調べ学習が必要になるようなものは避けました。生徒に「書ける」という自信をつけさせることを第一の目的としていたためです。また、独自課題は教員側で添削指導をして返却しました。時間内で書かせて、文章の設計図ごと提出をさせました。添削は、設計図を見たら何をどう書いてあるのか一望できるので、原稿用紙だけで添削していた時と比べると所要時間は3分の2くらいに短縮されました。加えて、10月に大阪 職業体験セミナー実行委員会主催「作文・創作コンテスト」に応募しました。応募者38名（高橋講座全員）中9名が入賞しました。論コミを実施以前は800字の原稿用紙を仕上げるのに2時間以上かかっていましたが、ほとんどの生徒が1時間半程度で書き終えました。思いのほか高い評価をいただき、生徒たちにとっては「論コミ」をやったよかったという充実感や、大きな自信を持つことにつながりました。

■書き手および読み手としての生徒の変化

4月当初はほぼ全員が、文章を書くのは苦手であると答えていましたが、9月頃には、自主的に小論文の過去問を「文章の設計図」を使って書く生徒が出てきました。生徒同士での相互評価の際も、はじめは「上手です」などとあっさりしていたものが、10回の「事例に・いつ・どこで」を学習したあたりから、「これは事例とは言えない」「同じことを2度書いている」「設計図通りに書いていない」「話し言葉は良くない」「略さず書くべき」「説得力のある事例だ」など、具体的な指摘ができるようになりました。このような経験から、論コミは一人でやっても力のつくものではないと実感しました。友だちの書いた文章を読み、自分との比較ができてこそ励みや自信につながっているようでした。

論コミ導入前、本校では小論文の指導において一部の教員に負担が集中するという課題がありました。小論文の指導は、時間も労力も要する上に何が正解なのかわかりにくく、指導のハードルが非常に高い分野です。しかし、「論理コミュニケーション」はその構成が、端的に説明されていて、誰でも「論理的な文章」を作成することが可能です。またルールがシンプルで国語力に関わらず、それぞれの理解度合いで学習を進めることができました。本校のように高校3年生という受験生が取り組んでも遅いということはなく、むしろ受験対策に大きく貢献したと思います。今年度は論コミ指導を外れておりますが、今後も生徒たちが論コミを続けられるようにすすめていこうと考えています。

高橋先生、金蘭会高校での工夫について共有頂き、ありがとうございました。

貴校では2019年に話し合いを重ねて、20年度から導入となりましたが、緊急事態宣言による休校等で決して順調な駆け出しとは言えない状況でした。しかし結果として、金蘭会高校の生徒の皆さんは、設計図がびっしり埋まるほどよく書く人が多く、担当添削者もその変化にとっても驚きました。そして、その裏には先生や友人からの励ましに加えて、追加演習・添削の実施など、生徒の書く力を高める工夫が多くあったということが今回明らかになりました。（上野）

セミナーにご参加くださった先生方、また学校現場の状況を共有くださった先生方、貴重なご意見を頂き本当にありがとうございました。論理コミュニケーションは2003年に慶大SFC研究所にて基礎研究をはじめ、今年で18年目となります。2018年には、一般財団法人SFCフォーラムの一事業として新たな展開を迎え、導入校も増加し、現在48校となりました。一方、新学習指導要領では「探究」の時間の創設や、その柱として「言語能力の育成」が盛り込まれ、教育課程全体を通じて言葉の力を育むことが求められており、論理コミュニケーションの重要性はますます高まっている状況があります。今回、発表させて頂いたキャリア教育への応用モデルは、まだまだ初期段階ではありますが、梅嶋先生の述べる3つを根拠に（指導及び計測ノウハウ、導入校の先生方の協働、国の重要インフラの維持発展を先導している大学や産業界のリーダーとの協働）、開発を進めて参ります。今後ともご協力をお願い申し上げます。（上野）

さて、2つめのテーマとして、学校独自の工夫について特集します。

2021年現在、全国48校で論理コミュニケーションの授業が実施されています。そして最近、各学校において独自の工夫をしながら、授業を行ってくださる学校が増えてきました。今回は長崎県立壱岐高等学校と、大阪府の私立金蘭会高等学校の担当の先生方に、独自に工夫された内容をお聞きしました。題して「こんな工夫をしてみました!」です。

「論コミ」実施校による実践レポート①（壱岐高校）

こんな工夫をしてみました

最後の検定を受ける前に、15コマのカリキュラムにはない
論コミ総復習の時間を独自に実施

■長崎県立壱岐高等学校 浦田幸徳先生（国語科）

対象：高校1年生（約130名）

実施科目：総合的な探究の時間

期間：2020年4月～（学校としては2018年度に開始）

実施シラバス：標準モデル15コマ（検定3回）



私は昨年度から壱岐高校に赴任し、初めて論コミを生徒たちとともに学びました。本校は検定3回モデルを採用していますが、「論理的に考え、書く力を習得できる、とても良い教材だ」と実感しながらも、検定の一回目から二回目にかけては、生徒の力はほとんど伸びていませんでした。そこで、三回目の検定の一週間前に、「論コミ総復習」の時間を取ることにしました。まず、検定結果を持参させ、フィードバックシートの項目ごとに成績が向上しなかった原因などを生徒自身に考えさせました。次に、「最後の検定で、自分が気をつけるべきポイント」をまとめさせ、さらに検定直前に、そのメモを見直させました。その結果、三回目は、総合評価がA（最高評価）の生徒が10人になるなど、成績の向上が見られました。この結果は、何より、担任の先生方のご協力のおかげだと実感しています。私は前述の「総復習」の当日、「次が最後の検定です。論コミで身につく力が、いかに受験や社会で役に立つのかをクラスで指導ください」と各クラス担当の先生方にお願ひしました。熱意を共有できた先生方のお言葉が生徒たちに響き、彼らの意識と行動が変わったのだらうと思います。また、今年1月に志望理由書を論コミの形式で書く機会がありましたが、年度当初と比較して、多くの生徒が論理的に文章を書けており、「文章の設計図」が、生徒たちに身につけていることを確認できました。

最後に、昨年12月、私は長崎県庁で開かれた論理コミュニケーションの研修会に参加し、実際に意見文を書いたのですが、「書くこと」に予想以上の時間を取られてしまい、生徒たちの大変さがよく分かりました。それと同時に、「論述力検定」がいかに受検者の頭をフル回転させて、「論理的に」鍛え上げてくれるものなのかを実感しました。これからも、この身につけた論理的な文章の設計図を生徒たちが確かなものにできるよう、授業をはじめ、さまざまな場面で論コミ的思考法を活用していきたいと思っています。

浦田先生、壱岐高校での工夫について共有頂き、ありがとうございました。

論理コミュニケーションの標準モデル（15コマ）では、第4, 9, 15回が検定受検となっておりますが、2回目や3回目の検定の直前に、その前に受検した検定の返却・解説回を設定しています。これは、個々人のフィードバックの記憶が確かなうちに新たなテーマで記述することで、次の検定で改善点が活かしやすいためです。しかし、生徒によっては授業内では十分に復習できなかったり、またはどこを指摘されているのかをうまく理解できていなかったりする場合があるという報告を頂くことがあります。壱岐高校では、先生方から論コミの重要性を伝えていただくとともに、フィードバックシートのコメントを見直す時間を十分にとっていただいたことが結果につながったようです。今回の実践レポートを通して、生徒ひとりひとりの個性を知る現場の先生だからこそできる声かけや励まし、論理コミュニケーションの専門家だからこそできる添削指導の両輪が書き手の学習効果を高める要因としてあげられると感じました。（上野）